

米 竹 遺 跡

第4次調査

—高齢者福祉施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2011

大分市教育委員会

序 文

本書を大分市埋蔵文化財調査報告書第109集として、ここに刊行いたします。

米竹遺跡は鶴崎台地に所在する弥生時代中期から後期の集落遺跡です。これまでの調査では居住施設である竪穴住居や食物を保存するための施設である貯蔵穴が多く見つかり、台地上での弥生集落の存在がわかっています。今回の調査でも多くの貯蔵穴が見つかり、調査区全体にわたって広がりを見せています。それらの貯蔵穴は、時期的な分布状況から集落内で場所を変えながら造り替えられていった可能性が考えられます。このことは今後、集落の範囲やその構造といった遺跡の実態を解明する上での重要な資料となりました。

本報告書が、埋蔵文化財の活用とともに、考古学や郷土史学の発展にとって有意義なものになれば幸いです。

最後になりましたが、今回の発掘調査や整理作業、報告書作成にあたって、ご理解とご協力をいただきました関係者各位の皆様方に対し、ここに深く感謝の意を表します。

平成23年3月31日

大分市教育委員会

教育長 足 立 一 馬

例 言

1. 本書は平成22年度、大分市大字千歳字花畑1770-1の一部において、幀恵の会（代表取締役佐藤恵次）の委託を受け実施した高齢者福祉施設建設に伴う米竹遺跡第4次発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、幀恵の会（代表取締役佐藤恵次）の全面的な協力のもと、大分市教育委員会が調査主体となって実施した。
3. 発掘調査期間は、平成22年10月4日～平成22年10月29日である。資料整理及び報告書の作成は調査終了後から平成23年3月まで行った。
4. 発掘調査に伴う機械及び人力による掘削及び埋戻作業は、大分市の委託を受け㈱九州文化財リサーチ（業務責任者 沖野誠）が行った。
5. 発掘調査における遺構の実測・写真撮影は、松浦憲治、奥村義貴、上原翔平が行い、遺構図面の製図は奥村が行った。
6. 出土遺物の整理作業は神田智美、小野千恵美、松本晴美、倉増美智代、木村藍子、佐藤良子が行った。
7. 本書に掲載した遺物実測図・製図・写真撮影等整理作業は大分市の委託を受け雅企画㈱（業務責任者 淵野玲子）が行った他、一部を松浦が行った。
8. 本書の執筆は松浦が、編集は奥村が行った。
9. 出土遺物、図面、写真等は、大分市教育委員会が収蔵・保管している。

凡 例

1. 遺構の規模はm、遺物の法量はcmをそれぞれ用いている。
2. 座標については、世界測地系の平面直角座標2系のX・Y座標を基準として調査を行った。図中に記載される方位は座標北（G.N）を指している。
3. 本書で用いた遺構略号は、SK：貯蔵穴、土坑、SX：性格不明遺構及び包含層を表している。
4. 本書の遺物実測図の縮尺はとくに断らない限り、土器は1/4、石製品1/2で統一した。なお遺物写真の縮尺は統一していない。
5. 本書に掲載される遺物の年代観については以下の報告書・論文を参考にした。
坪根伸也 2010 「弥生時代前期から中期の遺物」『下部遺跡群Ⅳ』大分市教育委員会
高橋 徹 2009 「大分の弥生式土器編年―早期～中期―（上）」『大分県立歴史博物館研究紀要』10 大分県立歴史博物館

目 次

第1章	はじめに	
第1節	調査経過	1
第2節	調査組織	1
第2章	遺跡の立地と環境	
第1節	地理的環境	2
第2節	歴史的環境	2
第3章	調査の成果	
第1節	調査の方法	4
第2節	遺構	4
第3節	遺物	15
第4章	まとめ	
第1節	これまでの調査	22
第2節	第4次調査の成果	22
第3節	結語	23

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	2
第2図	周辺主要遺跡分布図 (1/50,000)	2
第3図	米竹遺跡第4次調査区位置図 (1/3,000)	3
第4図	米竹遺跡第4次遺構配置図 (1/250)	5
第5図	米竹遺跡第4次全体遺構図 (1/250)	6
第6図	米竹遺跡第4次個別遺構実測図① (1/40)	8
第7図	米竹遺跡第4次個別遺構実測図② (1/40)	9
第8図	米竹遺跡第4次個別遺構実測図③ (1/40)	10
第9図	米竹遺跡第4次個別遺構実測図④ (1/40)	11
第10図	米竹遺跡第4次個別遺構実測図⑤ (1/40)	12
第11図	米竹遺跡第4次個別遺構実測図⑥ (1/40)	13
第12図	米竹遺跡第4次出土遺物実測図① (1/4)	16
第13図	米竹遺跡第4次出土遺物実測図② (1/4)	17
第14図	米竹遺跡第4次出土遺物実測図③ (1/2・1/4)	18
第15図	米竹遺跡第4次出土遺物実測図④ (1/2・1/4)	19

表 目 次

第1表 米竹遺跡第4次調査区出土遺物観察表①	20
------------------------------	----

第2表 米竹遺跡第4次調査区出土遺物観察表②	21
------------------------------	----

写真図版目次

写真図版1 調査区完掘写真

1. 1区完掘状況(北方向より)	2. 1区完掘状況(南方向より)	3. 1区完掘状況(東方向より)
4. 1区完掘状況(西方向より)	5. 2区完掘状況(北方向より)	6. 2区完掘状況(南方向より)
7. 2区完掘状況(東方向より)	8. 2区完掘状況(西方向より)	

写真図版2 遺構写真①

1. SK005土層断面(北方向より)	2. SK005完掘状況(東方向より)	3. SK015土層断面(南方向より)
4. SK015完掘状況(東方向より)	5. SK030完掘状況(東方向より)	6. SK035完掘状況(西方向より)
7. SK060土層断面(東方向より)	8. SK060完掘状況(西方向より)	

写真図版3 遺構写真②

1. SK070土層断面(西方向より)	2. SK070完掘状況(東方向より)	3. SK084土層断面(東方向より)
4. SK075・084完掘状況(東方向より)	5. SK090完掘状況(南方向より)	6. SK071土層断面(南方向より)
7. SK071完掘状況(西方向より)	8. SK046・048土層断面(南方向より)	

写真図版4 遺構写真③

1. SK048土層断面(南方向より)	2. SK048完掘状況(西方向より)	3. SK086・087土層断面(北方向より)
4. SK086・087完掘状況(東方向より)	5. SK055土層断面(北方向より)	6. SK055完掘状況(北方向より)
7. SK065土層断面(北方向より)	8. SK065完掘状況(南方向より)	

写真図版5 遺構写真④

1. SK052完掘状況(北方向より)	2. SK085土層断面(南方向より)	3. SK085完掘状況(北方向より)
4. SK010土層断面(北方向より)	5. SK010完掘状況(南方向より)	6. SK041遺物出土状況(東方向より)
7. SK051遺物出土状況(南方向より)	8. 調査風景	

写真図版6 出土遺物写真

1. 第15図SK005-01・02・03	2. 第15図SK030-01	3. 第15図SK030-03
4. 第15図SK035-01・02・04	5. 第15図SK035-03	6. 第15図SK075-01・02・03
7. 第15図SK084-01・02・03・04・05・06	8. 第15図SK071-01・02・03・04	9. 第15図SK087-01・02・03・04
10. 第16図SK086-01・02	11. 第17図SK025-01・02	12. 第17図SK049-01・02・03・04
13. 第15図SK049-06	14. 第15図SK051-01	15. 第16図SK013-01
16. 第17図SK088-01・02	17. 第18図SK080-02	18. 第18図SK080-04

第1章 はじめに

1. 調査経過

調査対象となった米竹遺跡は、大野川の支流乙津川の西側一帯に広がる標高40m前後の鶴崎台地に位置する。当該台地は、大分市中部を代表する弥生時代遺跡の集中する箇所として周知されており米竹遺跡も、これまでの調査において、弥生時代中期を中心とした遺跡の存在が確認されている。

今回調査対象地となった大分市大字千歳字花畑1770-1の一部について、株式会社恵の会代表取締役佐藤敬次による老人福祉施設建設が計画され、文化財有無の照会がなされた。当該地区については、ほぼ並行する形で開発計画がなされていた宅地造成地内にあたり、遺構の存在及び検出深度・分布について、確認されている状況であったことから、既に行なわれている確認調査の内容を伝えた上、建物基礎等により遺跡が破壊される区域について、記録保存を目的とした調査を行うこととする調査方針が協議された。

この協議を受け、事業主による文化財保護法第93条の2の届出を経て、大分県教育委員会教育長による「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について」の通知により、発掘調査実施の方針が示され発掘調査の実施に至った。

発掘調査は、株式会社恵の会代表取締役佐藤敬次氏との間で平成22年8月6日付けで締結された協定書・契約書に基づいて実施された。発掘調査は平成22年10月4日～10月29日にかけて行い、資料整理及び報告書の作成は調査終了後より平成23年3月31日まで実施した。

2. 調査組織

調査主体者 大分市教育委員会 教育長 足立 一馬

事務局 大分市教育委員会 教育部 文化財課

次長兼課長 玉永 光洋

課長補佐 福田 誠一

塔鼻 光司

係長 坪根 伸也

専門員 池邊千太郎

主査 神崎小由美

調査員 大分市教育委員会 教育部 文化財課

事務員 松浦 憲治

嘱託 奥村 義貴

羽田野裕之

上原 翔平

樺田 智美

小野千恵美

松木 晴美

倉増美智代

木村 藍子

佐藤 良子

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

大分市は、九州の東端、瀬戸内海の西端に位置し、大分県下を南北に流れ別府湾に注ぐ大分川、乙津川・大野川により、その下流部において大分平野や鶴崎台地などを形成している。

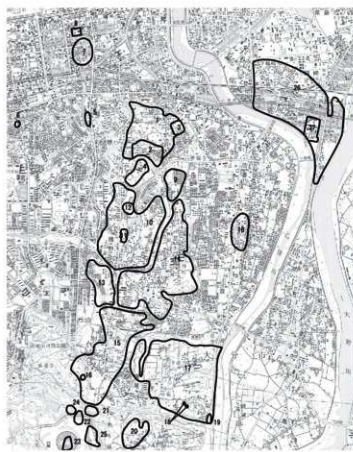
今回報告する米竹遺跡は西を大分川、東を乙津川・大野川に挟まれた南北にのびる鶴崎台地と呼ばれる台地上にあり、台地北端からは北に別府湾を望む。遺跡は台地の北東端に位置し、台地中央を南北にはする開析谷の東側、乙津川へと下る傾斜面との間の平坦面に立地している。



第1図 遺跡位置図

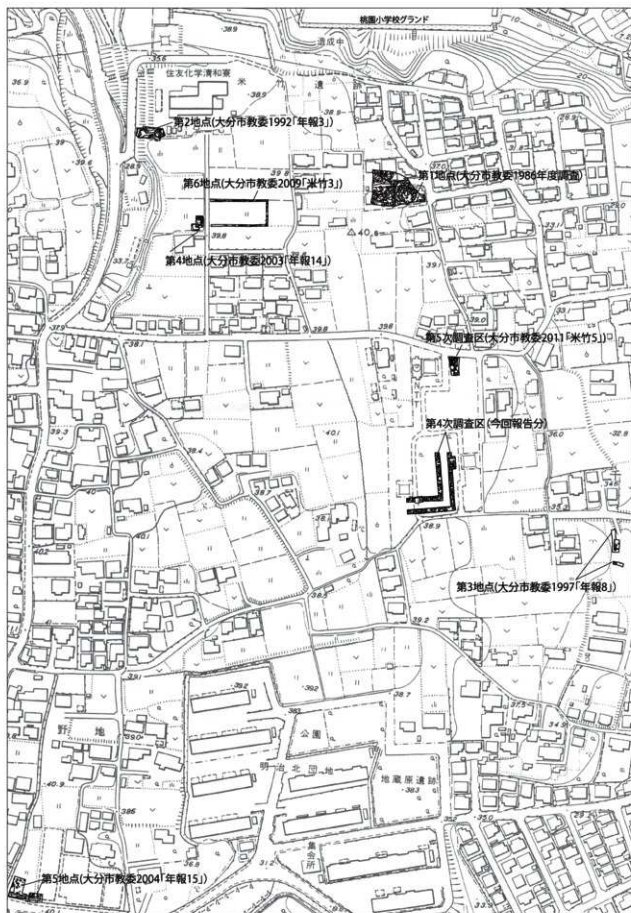
第2節 歴史的環境

米竹遺跡の所在する鶴崎台地上には、多くの遺跡が存在する。旧石器時代では地蔵原遺跡において扁平大型礫、二次加工品である剥片石器などが出土している。また多武尾遺跡では黒曜石製ナイフ形石器や流紋岩製の搔器や剥片、石核などが出土している。縄文時代では横尾貝塚が挙げられる。横尾貝塚では貝塚や住居域、水場遺構が確認されているほか、縄文時代早期から後期にかけての大量の土器が出土し、さらにかご入りの姫島産黒曜石など当時の流通をうかがい知ることのできる遺物が出土している。弥生時代において前期は数少ないが、中後期には尾崎遺跡や北の崎遺跡などがあり、住居跡や貯蔵穴が展開することが確認されている。また多武尾遺跡では周



	遺 跡 名
1	米竹遺跡
2	地蔵原遺跡
3	千歳城跡
4	尾崎遺跡
5	小池原貝塚
6	高城観音院備蓄銭出土地
7	高松東遺跡
8	高松陣屋跡
9	北の崎遺跡
10	猪野遺跡
11	猪野中原遺跡
12	猪野新土井遺跡
13	米良草遺跡
14	葛木遺跡
15	二目川遺跡
16	水分神社銅矛出土地
17	横尾遺跡
18	有田古墳
19	横尾貝塚
20	岡原遺跡
21	一方平Ⅰ遺跡
22	一方平Ⅱ遺跡
23	一方平Ⅲ遺跡
24	一方平Ⅳ遺跡
25	丸池遺跡
26	鶴崎町遺跡群
27	鶴崎御茶屋跡(鶴崎城跡)

第2図 周辺主要遺跡分布図 (1/50,000)



第3図 米竹遺跡調査区位置図 (1/3,000)

溝を巡らす環濠集落が展開しており、その周溝からは青銅製小銅鐸が出土している。ほかにも鶴崎台地南側の水分神社周辺において神社伝世の銅矛が出土するなど大分平野の中でも青銅器が多く出土する地域である。古墳時代は鶴崎台地西側の大分川寄りで横穴墓が多く展開し、南側では有田古墳が存在する。集落としては地蔵原遺跡が挙げられるが、弥生時代ほどの展開は見られない。集落が低地に移ったものと考えられる。古代では地蔵原遺跡で官衛的な施設が展開し、特異な瓦当を呈する軒丸瓦などが出土している。他にも井ノ久保遺跡では土師器焼成土坑が検出されている。中世においては千歳城が築かれ、地蔵原遺跡では集落が確認されるなど、長期間にわたって遺跡の立地する台地である。

第3章 調査の成果

第1節 調査の方法

第1章第1節で述べたように、今回の調査は、建物基礎によって遺跡が破壊される部分を調査対象としたため、調査区幅3.0mの平行する逆「L」字状の2つの調査区を設定し、基礎部分（3m×3mを18箇所）のみの遺構掘り下げを行った。その他、遺構保存が図られた部分については、遺構検出のみの調査とした。今回掲載した遺構の中に一部掘り下げを行っていないものが含まれているが、こうした未掘部分は基礎を外れ、遺構保存が図られたものである。

基本層序は、現地表面から約0.5mまでに現代の造成土を確認でき、その下位に黄褐色粘質土層（ソフトローム層）が存在する。遺構検出面は、黄褐色粘質土層上面である。

第2節 遺 構

検出した遺構は主に貯蔵穴と小土坑であり、堅穴住居跡などそれ以外の遺構は確認できなかった。

SK005（第6図）

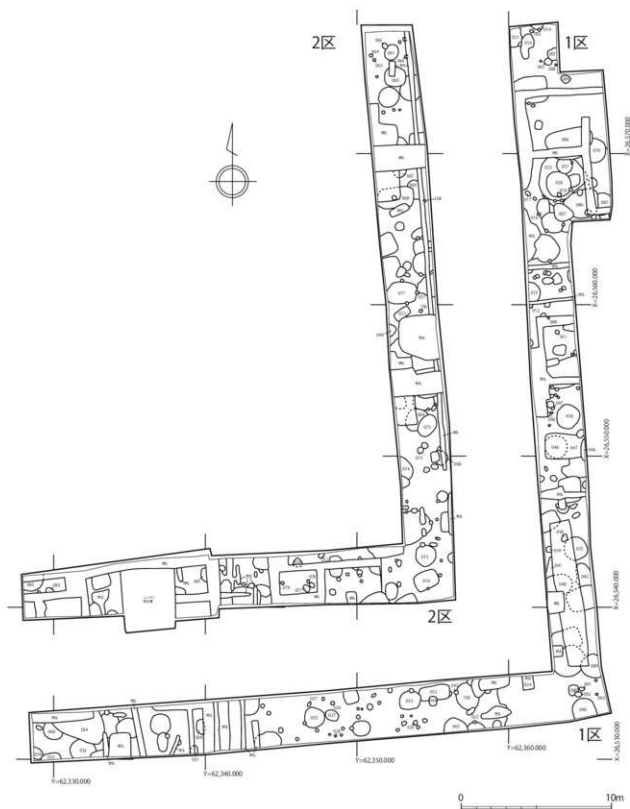
2区東側北端で検出した。平面形状は不整形円形を呈し、規模は直径約1.35m、深さ約1.0mを測る。断面形状は外側にやや膨らむ袋状を呈しており、中央には円形の浅い窪みが確認できる。平面及び断面形状から貯蔵穴と考えられる。埋土は主に黒褐色粘質土であり、地山ブロックを含んでいることから、人為的な埋め戻しがおこなわれたと考えられる。出土遺物には弥生土器（第12図SK005-01～03）がある。出土遺物から弥生時代中期中頃に帰属すると考えられる。

SK015（第6図）

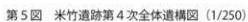
2区南東隅で検出した遺構で、SK010と隣接している。平面形状は不整形円形を呈し、規模は直径約1.45m、深さ約0.3mを測る。断面形状は下方に広がるフラスコ状を呈しており、中央には円形の直径約0.25m、深さ0.15mの小土坑を確認できる。平面及び断面形状から貯蔵穴と考えられる。埋土は黒褐色粘質土及び濃褐色粘質土であり、濃褐色粘質土には地山ブロックが含まれていることから、人為的な埋め戻しと考えられる。遺物は弥生土器壺・甕（第12図SK015-01・02）が出土している。出土遺物から弥生時代中期前半に帰属すると考えられる。

SK030（第6図）

1区東側中央付近で検出した。平面形状は不整形円形を呈し、規模は直径約1.6m、深さ約0.7mを測る。断面形状はやや外側に膨らむ袋状を呈し、中央には円形で浅い小土坑を確認できる。平面及び断面形状から貯蔵穴と考えられる。埋土は黒褐色粘質土で、地山ブロックを含んでおり、人為的な埋め戻しがおこなわれたと考えられる。地山ブロックの多寡で上下2層に分かれるが、基本的には同一層で、埋め戻しの単位であると思われる。出土遺物には弥生土器蓋・甕（第12図SK030-01～03）がある。出土遺物から弥生時代中期前半に帰属すると考えられる。



第4図 米竹遺跡第4次遺構配置図 (1/250)



SK035 (第6図)

1区東側南寄りに検出した。平面形状は円形を呈し、規模は直径約1.5m、深さ約0.55mを測る。断面形状は壁面がほぼ垂直に立ちあがる方形を呈し、中央には円形の浅い窪みを確認できる。平面及び断面形状から貯蔵穴と考えられる。埋土は暗褐色粘質土及び黒褐色粘質土で、地山ブロックを含んでおり、その多寡などで複数層に分かれるが、どれも人為的な埋め戻しと考えられることから、埋め戻しの際の単位によるものと思われる。遺物は弥生土器類(第12図SK035-01～04)が出土している。出土遺物から弥生時代中期前半に帰属すると考えられる。

SK048 (第7図)

1区東側中央で検出した遺構で、SK047に切られる。平面形状は円形を呈し、規模は直径約1.3m、深さ約0.3mを測る。断面形状は壁面が下方に広がるフラスコ状を呈し、中央にはやや浅い窪みを確認できる。平面及び断面形状から貯蔵穴と考えられる。埋土は黒褐色粘質土で、地山ブロックを多く含むことから人為的な埋め戻しと考えられる。遺物は弥生土器類(第12図SK048-01)が出土している。出土遺物から弥生時代中期中頃に帰属すると考えられる。

SK070 (第7図)

1区東側北寄りに検出した。平面形状は円形を呈し、規模は直径約1.6m、深さ約0.7mを測る。断面形状は壁面がやや外側に膨らむ袋状を呈し、中央には円形の浅い窪みが確認できる。平面及び断面形状から貯蔵穴と考えられる。埋土は黒褐色粘質土で、地山ブロックを多く含むことから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は弥生土器の下城式甕と思われる破片が出土しているが、小片のため図化していない。出土遺物から弥生時代中期に帰属すると考えられる。

SK087 (第7図)

1区東側北寄りに検出した遺構で、SK086に切られる。平面形状は不整形円形を呈し、規模は直径約1.5m、深さ約0.95mを測る。断面形状は壁面がやや外側に膨らむ袋状を呈し、中央には円形のやや浅い小坑が確認できる。平面及び断面形状から貯蔵穴と考えられる。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は弥生土器類(第12図SK087-01～04)が出土している。出土遺物から弥生時代中期中頃に帰属すると考えられる。

SK060 (第7図)

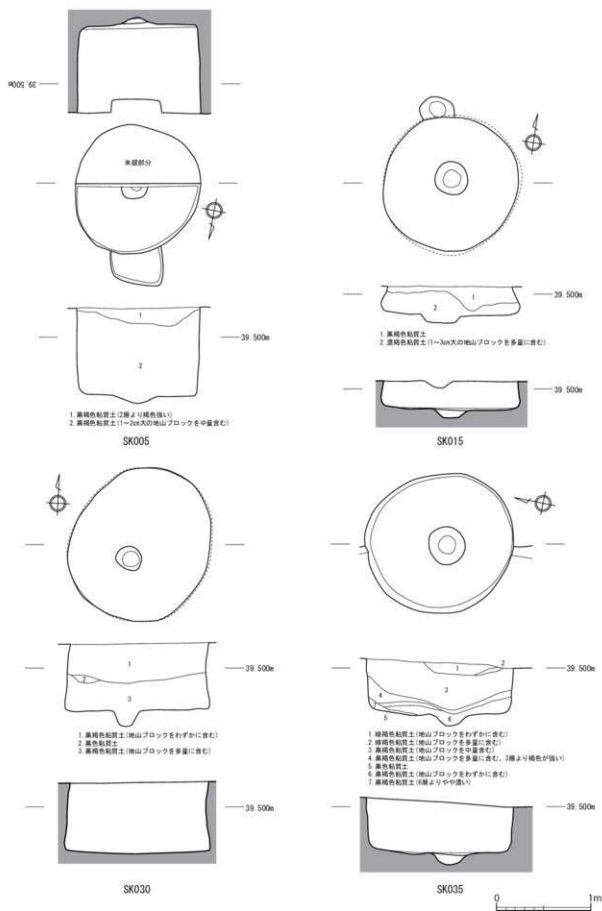
1区南側西端で検出した。平面形状は円形を呈し、規模は直径約1.7m、深さ約0.45mを測る。断面形状は下方に広がるフラスコ状を呈し、中央には円形の浅い窪み状の小坑が確認できる。平面及び断面形状から貯蔵穴と考えられる。埋土は濃褐色粘質土で、地山ブロックを多く含むことから人為的な埋め戻しがおこなわれたと考えられる。出土遺物には弥生土器類(第12図SK060-01・02)がある。出土遺物から弥生時代中期中頃に帰属すると考えられる。

SK075 (第8図)

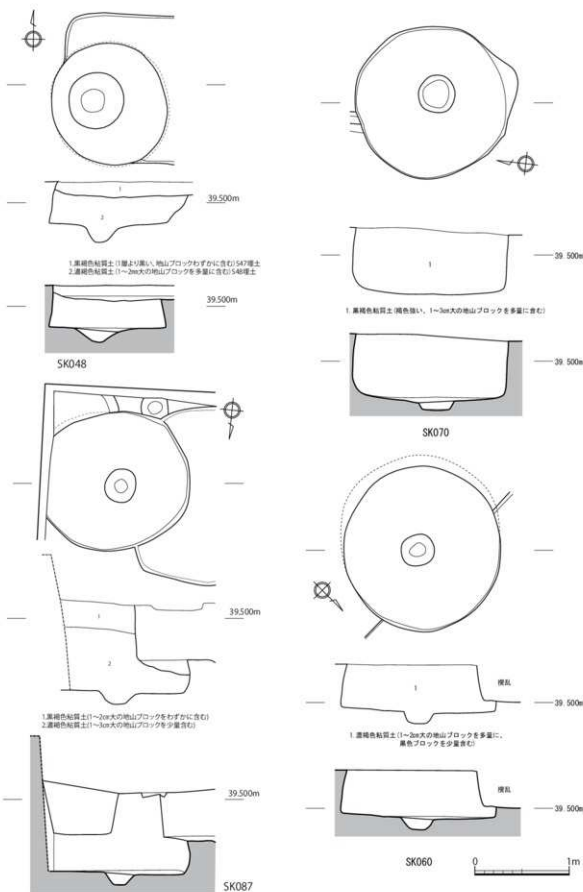
2区東側南寄りに検出した遺構で、SK084を切る。平面形状は不整形円形を呈し、規模は直径約1.5m、深さ約0.8mを測る。断面形状は壁面がやや外側に膨らむ袋状を呈し、中央には円形の浅い小坑が確認できる。平面及び断面形状から貯蔵穴と考えられる。埋土は黒褐色粘質土で、地山ブロックを多く含むことから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。遺物は、弥生土器類・甕(第12図SK075-01～04)が出土している。出土遺物及び切り合い関係から弥生時代中期後半に帰属すると考えられる。

SK084 (第8図)

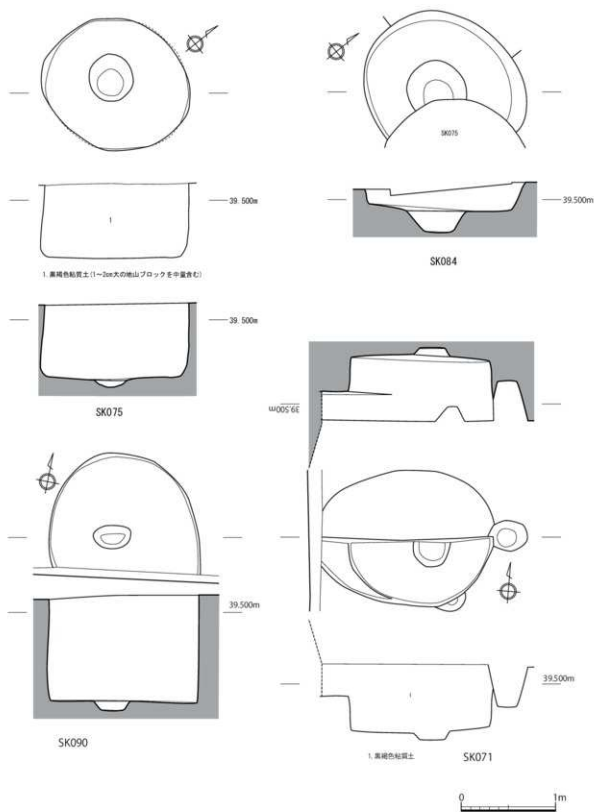
2区東側南寄りに検出した遺構で、SK075に切られる。平面形状は円形を呈し、規模は直径約1.6m、深さ約0.25mを測る。断面形状は皿形を呈し、中央には直径約0.6m、深さ約0.2mのやや大きな土坑を確認できる。壁面の立ち上がりはかなり緩やかであるが、遺構の規模が他と同程度なことや、中央に土坑が存在する点が共通することから、貯蔵穴の可能性が考えられる。出土遺物には弥生土器類・甕(第12図SK084-01～06)がある。出土遺物から弥生時代中期中頃～後半に帰属すると考えられる。



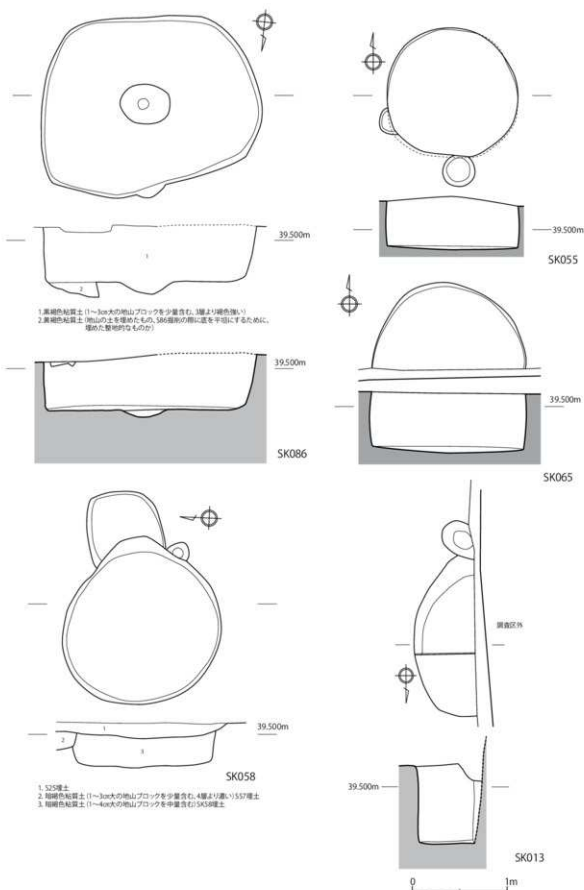
第6図 米竹遺跡第4次個別遺構実測図① (1/40)



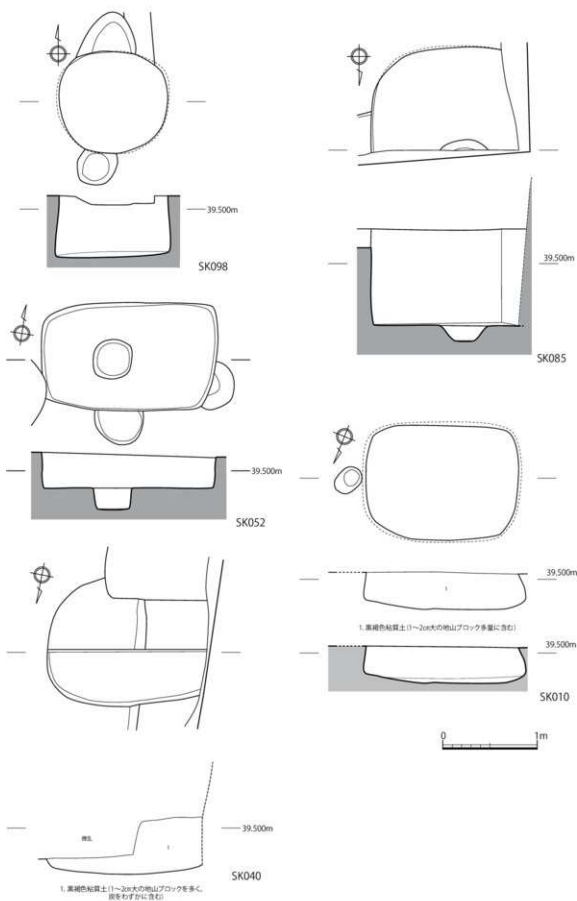
第7図 米竹遺跡第4次個別遺構実測図② (1/40)



第8図 米竹遺跡第4次個別遺構実測図③ (1/40)



第9図 米竹遺跡第4次個別遺構実測図④ (1/40)



第10図 米竹遺跡第4次個別遺構実測図⑤ (1/40)

SK090 (第8図)

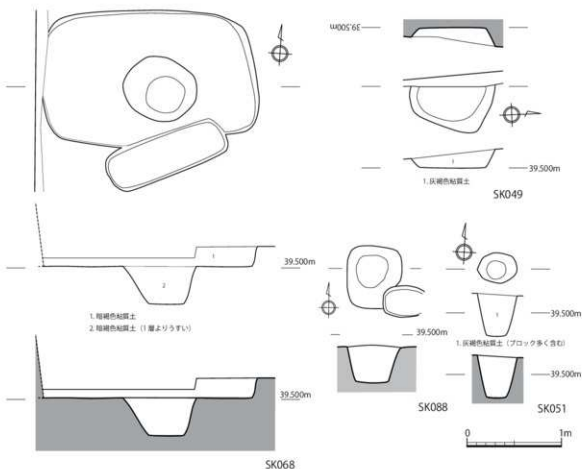
1区南東隅で検出した遺構で、一部調査区外にのびる。平面形状は不整形円形を呈し、規模は直径約1.6m、深さ約1.15mを測る。断面形状は壁面がほぼ垂直に立ちあがる方形を呈し、中央やや西寄りに円形の浅い窪みを確認できる。平面及び断面形状から貯蔵穴と考えられる。遺物には弥生土器壺・甕(第12図SK090-01・02)が出土している。出土遺物から弥生時代中期前半に帰属すると考えられる。

SK071 (第8図)

2区東側中央で検出した遺構で、SK051に切られる。一部調査区外にのびる。平面形状は不整形円形を呈し、規模は長径1.7m以上、短径約1.45m、深さ約0.75mを測る。西側にテラスが認められる。断面形状は方形を呈し、中央やや東寄りに円形の浅い窪みが確認できる。平面及び断面形状から貯蔵穴と考えられる。遺物は弥生土器甕・鉢(第12図SK071-01～04)が出土している。出土遺物から弥生時代中期前半に帰属すると考えられる。

SK086 (第9図)

1区東側北寄りで検出した遺構で、SK087を切る。平面形状は不整形円形を呈し、規模は長径約2.3m、短径約1.9m、深さ約0.6mを測る。断面形状は浅い方形を呈し、中央には楕円形の浅い窪みが確認できる。平面及び断面形状から貯蔵穴と考えられる。埋土は黒褐色粘質土であるが、東側のSK087と重なる部分においては黒褐色粘質土の下にブロック状の黄褐色粘質土の堆積が見られる。黄褐色粘質土のブロックは、SK087と重なる部分にしかその堆積が見られないことから、SK087の掘削によって弱くなった地盤を整地して遺構の底面を平坦に保つために人為的に封入された土ではないかと考えられる。出土遺物には弥生土器壺・甕(第13図SK086-01・02)がある。出土遺物及び切り合い関係から弥生時代中期中頃に帰属すると考えられる。



第11図 米竹遺跡第4次個別遺構実測図⑥ (1/40)

SK055（第9図）

1 区南側中央で検出した貯蔵穴である。平面形状は円形を呈し、規模は直径約1.35m、深さ約0.5mを測る。断面形状は壁面がやや外側に膨らむ袋状を呈し、底面に土坑はなく平坦である。平面及び断面形状から貯蔵穴と考えられる。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は弥生土器鉢（第13図SK055-01）が出土している。出土遺物から弥生時代中期前半に帰属すると考えられる。

SK065（第9図）

1 区南側中央で検出した遺構で、一部調査区外にのびる。平面形状は円形もしくは不整形円形と思われ、規模は直径約1.6m、深さ約0.6mを測る。断面形状は壁面がやや外側に膨らむ袋状を呈し、底面に土坑はなく平坦である。平面及び断面形状から貯蔵穴と考えられる。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は弥生土器の甕と思われる破片が出土しているが、小片のため図化していない。

SK058（第9図）

1 区東側北寄りで検出した遺構であり、SK025・058に切られる。平面形状は不整形円形を呈し、規模は直径約1.6m、深さ約0.3mを測る。断面形状は壁面がほぼ垂直に立ちあがる方形で、平面及び断面形状から貯蔵穴と考えられる。埋土は暗褐色粘質土で、地山ブロックを含む。遺物は弥生土器壺・甕（第13図SK058-01～03）が出土している。出土遺物から弥生時代中期中頃に帰属すると考えられる。

SK013（第9図）

1 区東側北寄りで検出した遺構で、一部調査区外にのびる。平面形状は不整形円形を呈すると考えられ、規模は直径約1.72m、深さ約0.8mを測る。断面形状は壁面がほぼ垂直に立ちあがる方形と考えられ、平面及び断面形状から貯蔵穴と考えられる。遺物は弥生土器片の他、磨製石鏃が出土しているが、弥生土器については小片のため図化せず、磨製石鏃（第13図SK013-01）のみを図化している。

SK098（第10図）

2 区東側南寄りで検出した貯蔵穴である。平面形状は円形を呈し、規模は直径約1.1m、深さ約0.6mを測る。断面形状は壁面がやや外側に膨らむ袋状を呈し、底面に土坑はなく平坦である。平面及び断面形状から貯蔵穴と考えられる。埋土は黒褐色粘質土である。遺物は弥生土器片が出土しているが、小片のため図化していない。

SK085（第10図）

2 区南側西端で検出した遺構で、一部調査区外にのびる。平面形状は不整形円形と考えられ、直径は約1.5m以上であるが、全体が確認できないため正確には不明である。深さは約1.0mを測る。断面形状は壁面がほぼ垂直に立ちあがる方形と考えられ、中央に円形と考えられる小土坑が確認できる。平面及び断面形状から貯蔵穴と考えられる。遺物は弥生土器甕（第13図SK085-01・02）が出土している。出土遺物から弥生時代中期中頃に帰属すると考えられる。

SK052（第10図）

1 区南側東寄りで検出した。平面形状は隅丸長方形を呈し、規模は長軸約1.9m、短軸約1.15m、深さ約0.3mを測る。断面形状は浅い方形を呈し、中央には円形の深い小土坑が確認できる。平面及び断面形状から貯蔵穴と考えられる。遺物は弥生土器壺・甕・高坏（第13図SK052-01～05）が出土している。出土遺物から弥生時代中期後半に帰属すると考えられる。

SK010（第10図）

2 区南東隅で検出した。平面形状は隅丸長方形を呈し、規模は長軸約1.6m、短軸約1.2m、深さ約0.4mを測る。断面形状は壁面が下方に広がるフラスコ状を呈し、底面は平坦ではなく、ややレンズ状を呈する。平面及び断面形状から貯蔵穴と考えられる。埋土は黒褐色粘質土で、地山ブロックを多く含むことから、人為的な埋め戻しと考えられる。遺物は弥生土器甕（第13図SK010-01）が出土している。出土遺物から弥生時代中期前半に帰

属すると考えられる。

SK040 (第10図)

1区東側南寄りで検出した遺構で、一部調査区外にのびる。平面形状は不整楕円形を呈し、規模は長径1.7m以上、短径1.3m以上、深さ約0.55mを測る。立ち上がりが攪乱による削平及び調査区外のため、断面形状は不明であるが、底面は平坦ではなく、ややレンズ状を呈する。埋土は黒褐色粘質土で、地山ブロックを多く含むことから、人為的な埋め戻しと考えられる。削平と調査区外のため全体が不明であるが、底面の形状と埋土がSK010と類似することから貯蔵穴と判断した。遺物は弥生土器（第13図SK040-01）が出土している。出土遺物から弥生時代中期中頃に帰属すると考えられる。

SK068 (第11図)

2区東側北寄りで検出した遺構で、一部調査区外にのびる。平面形状は隅丸長方形を呈し、規模は長軸約2.2m、短軸約1.4m、深さ約0.2mを測る。埋土は暗褐色粘質土である。中央に土坑が存在するが、その土坑は層位から切り合い関係をもった別遺構である。平面形状及び規模から貯蔵穴の可能性が考えられる。遺物は弥生土器（第13図SK068-01・02）が出土している。出土遺物から弥生時代中期中頃に帰属すると考えられる。

SK049 (第11図)

2区東側中央で検出した土坑で、一部調査区外にのびる。平面形状は不整円形を呈すると考えられ、規模は直径約0.9m、深さ約0.15mを測る。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は弥生土器（第14図SK049-01～06）が出土しており、かなり密集した状態であった。出土遺物から弥生時代中期後半に帰属すると考えられる。

SK088 (第11図)

1区南東隅で検出した。平面形状は長方形を呈し、規模は長軸約0.67m、短軸約0.56m、深さ約0.4mを測る。遺物は弥生土器、台付鉢（第14図SK088-01・02）が出土した。出土遺物から弥生時代中期中頃に帰属すると考えられる。

SK051 (第11図)

2区東側中央で検出した。平面形状は円形を呈し、規模は直径約0.4m、深さ約0.45を測る。埋土は灰褐色粘質土である。遺物は弥生土器（第14図SK051-01）のほぼ完形品が出土している。出土遺物から弥生時代中期後半に帰属すると考えられる。

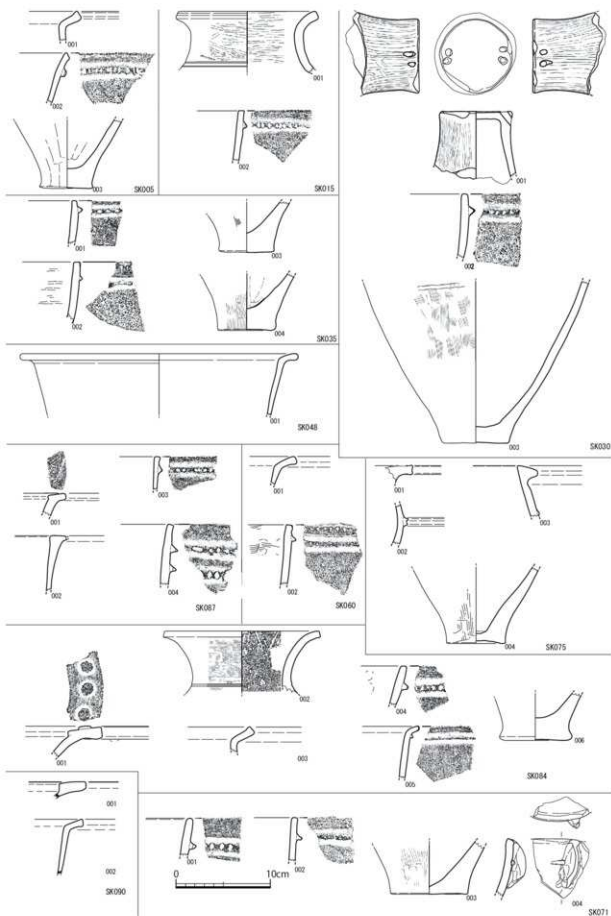
第3節 遺物

第12図SK005-01～03はSK005出土の弥生土器である。1・2は甕の口縁部で、1は東北部九州系である。端部をつまみ上げる。2は下城式甕の口縁部で、外側に開く。口縁部下に1条の刻目突帯をめぐらす。3は底部である。1～3はともに胎土に角閃石・長石を含む。

第12図SK015-01・02はSK015出土の弥生土器である。1は壺口縁部で、肩部に2条の沈線をめぐらす。胎土に角閃石・長石・石英を含む。2は下城式甕口縁部で、わずかに内湾して立ち上がる。口縁部下に1条の刻目突帯をめぐらす。胎土に角閃石・長石を含む。

第12図SK030-01～03はSK030出土の弥生土器である。1は蓋で、上部から側方にかけて2個1対の穿孔が見られる。2・3は甕である。2は下城式の口縁部で、やや内湾して立ち上がる。口縁部下に1条の刻目突帯をめぐらす。1～3はともに胎土に角閃石・長石・石英を含む。

第12図SK035-01～04はSK035出土の弥生土器である。1・2は下城式甕の口縁部で、内湾して立ち上がる。ともに口縁部下に1条の刻目突帯をめぐらす。胎土に角閃石・長石を含む。3・4は甕の底部である。胎土に角閃石・長石・石英を含む。



第12図 米竹遺跡第4次出土遺物実測図① (1/4)

第12図SK048-01はSK048出土の弥生土器甕の口縁部である。端部を丸く肥厚し、胎土に角閃石・長石・石英を含む。

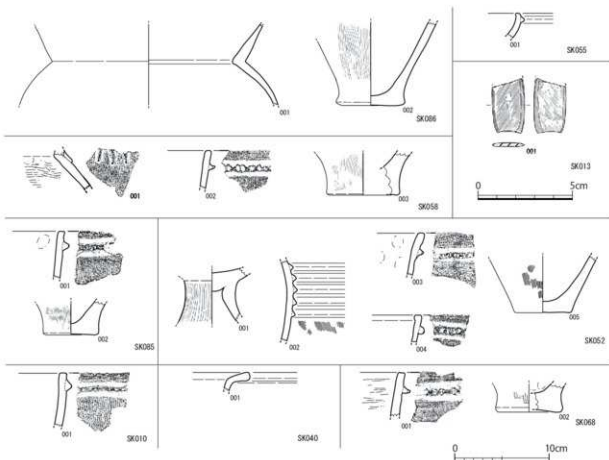
第12図SK087-01～04はSK087出土の弥生土器である。1は甕の口縁部で、口縁端部を肥厚し、上面に2条の山形文を施す。2は甕の口縁部で、外面を断面三角形に肥厚する。3・4は下城式甕の口縁部で、3は1条、4は2条の刻目突帯をめぐらす。1～4はともに胎土に角閃石・長石を含む。

第12図SK060-01・02はSK060出土の弥生土器である。1は甕の口縁部で、東北部九州系のものである。胎土に角閃石を含む。2は下城式甕の口縁部で、わずかに外側に開く。口縁端部に刻目を施し、口縁部下に1条の刻目突帯をめぐらす。胎土に長石・石英を含む。

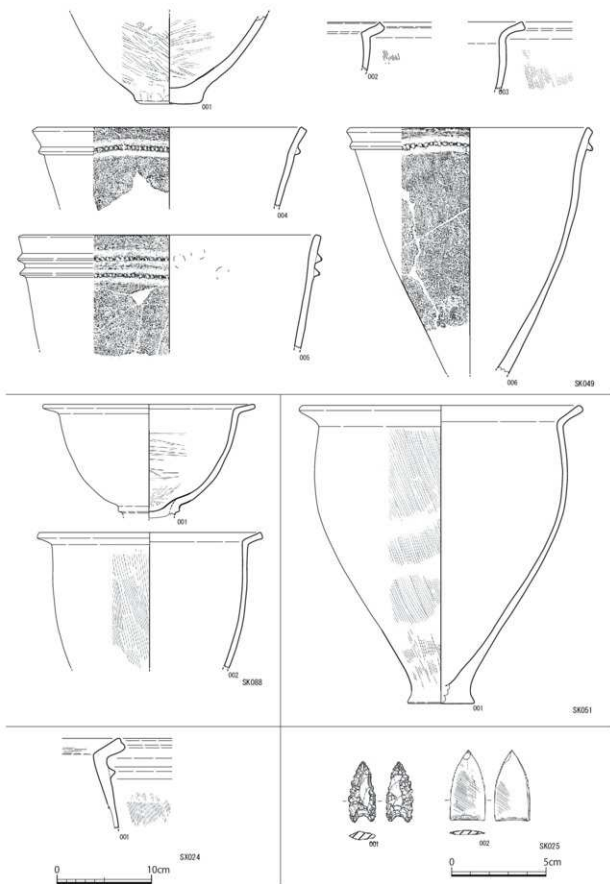
第12図SK075-01～04はSK075出土の弥生土器である。1は甕の口縁部で、口縁部内面を肥厚する。2は甕の胴部で、M字形の突帯を1条めぐらす。3は甕の口縁部で、端部外面を断面三角形に肥厚する。4は甕の底部である。1・2・4は胎土に角閃石・長石を、3は胎土に長石を含む。

第12図SK084-01～06はSK084出土の弥生土器である。1・2は甕の口縁部で、1は口縁端部内面を肥厚し、上面に円形浮文を貼り付ける。2は口縁部内面に山形文を施し、頸部と肩部の境に1条の沈線めぐる。3～5は甕の口縁部で、3は東北部九州系である。4は下城式甕で、わずかに外側に開く。口縁部下に1条の刻目突帯をめぐらす。5は東北部九州系で、口縁部下に1条の三角突帯をめぐらす。6は甕の底部である。1・6は胎土に角閃石・長石・石英を、3～5は胎土に角閃石・長石を、2は胎土に長石を含む。

第12図SK090-01・02はSK090出土の弥生土器である。1は甕の口縁部で、口縁内面を肥厚する。胎土に角閃石・石英を含む。2は甕の口縁部で、東北部九州系である。口縁端部内面をやつつまみ上げるように肥厚する。磨減が著しい。胎土に長石・石英を含む。



第13図 米竹遺跡第4次出土遺物実測図② (1/4)



第14図 米竹遺跡第4次出土遺物実測図③ (1/2・1/4)

第12図SK071-01～04はSK071出土の弥生土器である。1・2は下城式甕の口縁部で、わずかに外側に開く。口縁部下に1条の刻目突帯をめぐらす。3は甕の底部である。4は鉢の口縁部で、口縁部直下に縦方向で中央に穿孔を有する耳がつく。1・2・4は胎土に角閃石・長石を、3は胎土に長石・石英を含む。

第13図SK086-01・02はSK086出土の弥生土器である。1は甕の口縁部で、端部は欠失している。胎土に角閃石・長石・石英を含む。2は甕の底部で、胎土に角閃石を含む。

第13図SK055-01はSK055出土の弥生土器で、鉢の口縁部である。口縁部下に1条の突帯文をめぐらす。胎土に角閃石・長石を含む。

第13図SK058-01～03はSK058出土の弥生土器である。1は甕で、頸部に三角浮文を張り付ける。2は下城式甕の口縁部で、わずかに外側に開く。口縁部下に1条の刻目突帯をめぐらす。3は甕の底部である。え1～3は胎土に長石を含む。

第13図SK013-01はSK013出土の磨製石鏃である。先端が欠けている。

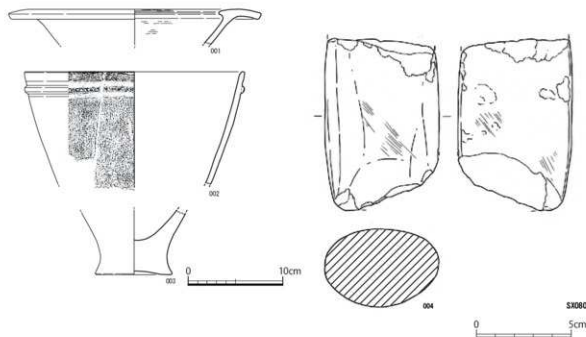
第13図SK085-01・02はSK085出土の弥生土器である。1は下城式甕の口縁部で、わずかに外側に開く。口縁部下に1条の刻目突帯をめぐらす。胎土に長石・石英を含む。2は甕の底部で、胎土に長石を含む。

第13図SK052-01～05はSK052出土の弥生土器である。1は高環もしくは台付鉢の脚部で、柱状部にタテ方向のミガキを施す。内外面に赤色塗彩を施す。胎土に角閃石・長石を含む。2は甕の胴部で、5条の三角突帯をめぐらす。胎土に長石・石英を含む。3・4は下城式甕の口縁部で、ともに1条の刻目突帯をめぐらし、胎土に角閃石・長石を含む。5は甕の底部で、胎土に長石を含む。

第13図SK010-01はSK010出土の弥生土器である。下城式甕の口縁部で、わずかに内湾する。口縁端部に刻目を施し、口縁部下に1条の刻目突帯をめぐらす。胎土に角閃石・長石を含む。

第13図SK040-01はSK040出土の弥生土器で、甕の口縁部である。端部をつまみあげるタイプで、東北部九州系である。胎土に角閃石・長石を含む。

第13図SK068-01・02はSK068出土の弥生土器である。1は下城式甕の口縁部で、わずかに外側に開く。口縁部下に1条の刻目突帯をめぐらす。胎土に角閃石・長石を含む。2は甕の底部で、胎土に長石を含む。



第15図 米竹遺跡第4次出土遺物実測図④ (1/2・1/4)

第1表 米竹遺跡第4次調査区出土遺物観察表①

調査番号	発掘位置	種別	品名	法		色		調型・経緯		出土	備考	通し番号 (番号)
				(土器)	(土器)	(土器)	(土器)	外	内	外	内	
第12区	SK005-01	6-1	SK005	赤土器	黒	3.1 + a	—	浅黄緑	浅黄緑	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	001
第12区	SK005-02	6-1	SK005	赤土器	黒	5.3 + a	—	—	—	ナデ・初め口突部	ナデ	002
第12区	SK005-03	6-1	SK005	赤土器	黒	7.3 + a	5.6	—	—	ミナミ・ミナミナデ・ナデ	ミナミ・ミナミナデ・ナデ	003
第12区	SK013-01	—	SK013	赤土器	赤 (14.4)	6.5 + a	—	—	—	ヨコナデ・ミナミ・ミナミ・ミナミナデ	ミナミ	005
第12区	SK015-02	—	SK015	赤土器	黒	5.3 + a	—	—	—	ヨコナデ・ミナミ・ミナミ・ミナミナデ	ナデ	006
第12区	SK020-01	6-2	SK020	赤土器	黒	7.7 + a	7.4	—	—	ナデ・ミナミ	ナデ	009
第12区	SK020-02	—	SK020	赤土器	黒	6.8 + a	—	—	—	ナデ・初め口突部	ナデ	008
第12区	SK020-03	6-3	SK020	赤土器	黒	17.2 + a	7.0	—	—	ハナミ・ナデ・ナデ・ナデ	ナデ	010
第12区	SK035-01	6-4	SK035	赤土器	黒	4.6 + a	—	—	—	ナデ・初め口突部	ナデ	012
第12区	SK035-02	6-4	SK035	赤土器	黒	6.5 + a	—	—	—	ヨコナデ・ミナミ・ミナミ・ミナミナデ	ミナミ	011
第12区	SK035-03	6-5	SK035	赤土器	黒	5.3 + a	5.9	—	—	ナデ・ハナミ・ナデ	ナデ	014
第12区	SK035-04	6-4	SK035	赤土器	黒	6.0 + a	6.0	—	—	ハナミ・ナデ	ナデ	013
第12区	SK048-01	—	SK048	赤土器	黒 (28.0)	6.5 + a	—	—	—	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	017
第12区	SK087-01	6-9	SK087	赤土器	赤	2.4 + a	—	—	—	ヨコナデ・山形	ヨコナデ	060
第12区	SK087-02	6-9	SK087	赤土器	黒	5.8 + a	—	—	—	ヨコナデ・ナデ・ナデ	ナデ	061
第12区	SK087-03	6-9	SK087	赤土器	黒	3.5 + a	—	—	—	初め口突部・ナデ	ナデ	062
第12区	SK087-04	6-9	SK087	赤土器	黒	6.4 + a	—	—	—	初め口突部・ナデ	ナデ	063
第12区	SK060-01	—	SK060	赤土器	黒	3.0 + a	—	—	—	ナデ	ナデ	033
第12区	SK060-02	—	SK060	赤土器	黒	6.4 + a	—	—	—	ヨコナデ・ハナミ・ハナミ・ハナミナデ	ヨコナデ・ハナミ・ハナミ・ハナミナデ	034
第12区	SK075-01	6-6	SK075	赤土器	赤	1.8 + a	—	—	—	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	042
第12区	SK075-02	6-6	SK075	赤土器	赤	4.3 + a	—	—	—	初め口突部・ナデ	ナデ	043
第12区	SK075-03	6-6	SK075	赤土器	赤	5.4 + a	—	—	—	ヨコナデ・初め口突部・ナデ	ナデ	044
第12区	SK075-04	—	SK075	赤土器	黒	8.1 + a (6.0)	—	—	—	ヨコナデ・ナデ	ナデ	045
第12区	SK084-01	6-7	SK084	赤土器	赤	3.3 + a	—	—	—	初め口突部・ナデ	ナデ	050
第12区	SK084-02	6-7	SK084	赤土器	赤 (16.1)	6.6 + a	—	—	—	ヨコナデ・ハナミ・ハナミ・ハナミナデ	ヨコナデ・ハナミ・ハナミ・ハナミナデ	051
第12区	SK084-03	6-7	SK084	赤土器	黒	2.7 + a	—	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ	052
第12区	SK084-04	6-7	SK084	赤土器	黒	4.1 + a	—	—	—	ヨコナデ・ハナミ・ハナミ・ハナミナデ	ヨコナデ・ハナミ・ハナミ・ハナミナデ	054
第12区	SK084-05	6-7	SK084	赤土器	黒	5.5 + a	—	—	—	ヨコナデ・ハナミ・ハナミ・ハナミナデ	ヨコナデ・ハナミ・ハナミ・ハナミナデ	053
第12区	SK090-01	6-7	SK090	赤土器	赤	5.0 + a	6.4	—	—	ナデ	ナデ	055
第12区	SK090-02	—	SK090	赤土器	赤	2.0 + a	—	—	—	ナデ	ナデ	069
第12区	SK090-03	6-8	SK091	赤土器	黒	3.9 + a	—	—	—	ヨコナデ・初め口突部	ナデ	038
第12区	SK071-01	6-8	SK071	赤土器	黒	4.7 + a	—	—	—	初め口突部・ナデ	ナデ	039
第12区	SK071-02	6-8	SK071	赤土器	黒	5.6 + a (7.7)	—	—	—	ハナミ・ミナミ・ナデ	ナデ	041
第12区	SK071-03	6-8	SK071	赤土器	黒	6.3 + a	—	—	—	ナデ	ナデ	040
第12区	SK086-01	6-10	SK086	赤土器	赤	8.6 + a	—	—	—	ナデ	ナデ	058
第13区	SK086-02	6-10	SK086	赤土器	黒	8.9 + a	5.9	—	—	ナデ	ナデ	059
第13区	SK055-01	—	SK055	赤土器	黒	2.6 + a	—	—	—	ヨコナデ・ナデ・初め口突部	ナデ	035
第13区	SK055-02	—	SK055	赤土器	黒	4.7 + a	—	—	—	ナデ・ナデ	ナデ	036
第13区	SK055-03	—	SK055	赤土器	黒	4.0 + a	—	—	—	ヨコナデ・ハナミ・ハナミ・ハナミナデ	ナデ	031
第13区	SK055-04	—	SK055	赤土器	黒	4.4 + a (7.2)	—	—	—	ハナミ・ナデ	ナデ	032
第13区	SK013-01	6-13	SK013	石器	石 (2.9)	1.7	0.2	—	1.82	ナデ	ナデ	066
第13区	SK065-01	—	SK065	赤土器	黒	5.0 + a	—	—	—	ナデ・初め口突部	ナデ	057
第13区	SK085-02	—	SK085	赤土器	黒	3.6 + a (3.2)	—	—	—	ハナミ・ナデ	ナデ	056
第13区	SK052-01	—	SK052	赤土器	黒	5.9 + a	—	—	—	ナデ・ナデ	ナデ	029
第13区	SK052-02	—	SK052	赤土器	赤	8.6 + a	—	—	—	ヨコナデ・ハナミ・ハナミ・ハナミナデ	ナデ	025
第13区	SK052-03	—	SK052	赤土器	黒	4.5 + a	—	—	—	ナデ・初め口突部・ナデ	ナデ	026

第2表 米竹遺跡第4次調査区出土遺物観察表②

図録番号	写真	出土層別	種類	図録	法 器					色 相		割 型・形 様		胎 土	備 考	備 考 (参考頁)
					土器 (最大径)	陶器 (最大径)	瓦片 (最大径)	瓦片	瓦片	外 面	内 面	外 面	内 面			
第13図 SK052-04	—	SK052	赤生土器	甕	—	2.9 + a	—	—	—	灰黄陶	磨	ヨコナデ・初め目突帯	ヨコナデ	黄白・角閃石・ 白磁石		027
第13図 SK052-05	—	SK052	赤生土器	甕	—	6.0 + a	5.8	—	—	磨	にぶい・黄陶	ハケ目・ナデ	ナデ	白磁石・黄白		028
第13図 SK010-01	—	SK010	赤生土器	甕	—	5.7 + a	—	—	—	磨	磨	ヨコナデ・ハケ目・ 初め目・初め目突帯	ヨコナデ・ナデ	白磁石・黄白・ 白磁石		004
第13図 SK040-01	—	SK040	赤生土器	甕	—	2.0 + a	—	—	—	黄陶	黄陶	ヨコナデ	ヨコナデ	黄白・角閃石・ 白磁石		015
第13図 SK008-01	—	SK008	赤生土器	甕	—	4.7 + a	—	—	—	磨	磨	ヨコナデ・ハケ目・ 初め目突帯	ミガキ	黄白・角閃石・ 白磁石		036
第13図 SK008-02	—	SK008	赤生土器	甕	—	3.0 + a	16.60	—	—	磨	灰黄陶	ハケ目・ナデ	ナデ・粗サエ	黄白・白磁石		037
第14図 SK049-01	6-12	SK049	赤生土器	甕	—	9.6 + a	6.0	—	—	磨	磨	ミガキ・工具痕・ナ デ・ナデ	ミガキ・ナデ	黄陶・黄白・ 白磁石	外面に黄陶 あり	022
第14図 SK049-02	6-12	SK049	赤生土器	甕	—	5.2 + a	—	—	—	灰黄陶	灰黄陶	ヨコナデ・ハケ目	ヨコナデ・ナデ	黄白・角閃石・ 白磁石		021
第14図 SK049-03	6-12	SK049	赤生土器	甕	—	7.1 + a	—	—	—	灰黄陶	灰黄陶	ヨコナデ・ハケ目	ヨコナデ・ナデ	黄陶・黄白・ 白磁石		020
第14図 SK049-04	6-12	SK049	赤生土器	甕	(31.0)	12.1 + a	—	—	—	にぶい・黄陶	にぶい・黄陶	ヨコナデ・初め目突 帯・ナデ	粗サエ・不明	黄白・角閃石・ 白磁石		018
第14図 SK049-05	6-12	SK049	赤生土器	甕	(28.0)	8.4 + a	—	—	—	磨	黄陶	ヨコナデ・ハケ目・ 初め目突帯	ヨコナデ・ナデ	黄白・角閃石・ 白磁石		019
第14図 SK049-06	6-13	SK049	赤生土器	甕	(25.1)	26.0 + a	—	—	—	明赤陶	明赤陶	ナデ・初め目突帯	ナデ	黄白・角閃石・ 白磁石		023
第14図 SK088-01	6-16	SK088	赤生土器	台付鉢	(22.1)	12.0 + a	—	—	—	磨	磨	ヨコナデ・ナデ・粗 サ付け突帯	ヨコナデ・ナデ・ 工具痕・ミガキ	黄陶・黄白・ 白磁石		063
第14図 SK088-02	6-16	SK088	赤生土器	甕	(23.2)	14.4 + a	—	—	—	にぶい・黄陶	浅黄陶	ヨコナデ・ハケ目	ヨコナデ・ナデ	黄白・角閃石・ 白磁石	外面にスス 付着	064
第14図 SK051-01	6-14	SK051	赤生土器	甕	(29.3)	31.5	(6.80)	—	—	にぶい・黄陶	にぶい・黄陶	ヨコナデ・ハケ目・ 初め目突帯	ヨコナデ・ナデ	黄陶・黄白・ 白磁石		024
第14図 SK025-01	—	SK024	赤生土器	甕	—	9.5 + a	—	—	—	黄陶	灰黄	ヨコナデ・ハケ目・ 初め目突帯	ヨコナデ・ハケ 目・ナデ	黄陶・黄白・ 白磁石		007
第14図 SK025-01	6-11	SK025	石皿	石皿	3.2	1.4	0.5	—	1.82							068
第14図 SK025-02	6-11	SK025	石皿	石皿	3.8	1.9	0.3	—	1.92							067
第15図 SK080-01	—	SK080	赤生土器	高杯	(26.6)	3.7 + a	—	—	—	磨	磨	不明	ミガキ	黄陶・黄白・ 白磁石		046
第15図 SK080-02	6-17	SK080	赤生土器	甕	23.0	11.9 + a	—	—	—	灰黄陶	にぶい・黄陶	ヨコナデ・ハケ目・ 初め目突帯	ヨコナデ・ナデ	黄白・角閃石・ 白磁石	外面にスス 付着	047
第15図 SK080-03	—	SK080	赤生土器	甕	—	6.8 + a	(7.80)	—	—	明赤陶	明赤陶	ナデ・不明	不明	黄陶・黄白・ 白磁石		048
第15図 SK080-04	6-18	SK080	石皿	石皿	(9.13)	6.0	4.1	—	35.21							049

第14図SK049-01～06はSK049出土の弥生土器である。1は甕の底部で、外面にミガキを施す。2～6は甕の口縁部で、2・3は東北部九州系である。ともに端部をつまみあげる。4～6は下城式で、4・6は1条、5は2条の刻目突帯を外口縁部下にめぐらす。1～3は胎土に角閃石・長石を、4～6は胎土に角閃石・長石・石英を含む。

第14図SK088-01・02はSK088出土の弥生土器で、1は台付鉢の体部である。胎土に角閃石・長石を含む。2は甕の口縁部で、東北部九州系である。胎土に角閃石・長石・石英を含む。

第14図SK051-01はSK051出土の弥生土器で、完形に近い。東北部九州系の甕で、口縁端部をわずかにつまみ上げ、胴部に縦方向のハケ目を施す。胎土に角閃石・長石を含む。

第14図SK024-01は1区南側東寄りにある攪乱穴から出土した弥生土器である。東北部九州系の甕の口縁部で、頸部下に1条の三角突帯をめぐらす。胎土に角閃石・長石を含む。

第14図SK025-01・02は1区東側北寄りに検出したSK025出土の石皿である。1は打製石皿で、2は磨製石皿である。SK025はSK058を切る遺構である。

第15図SK080-01～04は1区南東隅でSK088・090を覆っていた包含層から出土した。1～3は弥生土器、4は石斧である。1は高杯もしくは台付鉢の口縁部で、鋤先状に内面を肥厚する。2は甕の口縁部で、下城式である。口縁部下に1条の刻目突帯をめぐらす。3は甕の底部である。4は大型蛤刃石斧で、刃部が欠けている。

第4章 まとめ

第1節 これまでの調査

これまでに実施された米竹遺跡における周辺の調査（第3図）では、第2地点で、弥生時代後期の溝、中期の竪穴建物跡や貯蔵穴などが確認されている。第3地点では中世の遺物などが確認されている。また、第4地点では、弥生時代中期の竪穴建物跡の主柱と思われる柱穴や貯蔵穴、土坑などが確認され、貯蔵穴の一部からは米・キビ・アワなどの炭化穀物類、炭化木材片や緑色片岩製の磨製石簾素材などが出土している。第4地点に隣接する第3次調査（第6地点）では、弥生時代中期前半から中頃の竪穴建物跡、貯蔵穴、溝が確認されている。第4地点及び第3次調査はともに貯蔵穴に比して竪穴建物跡が少ないものの、その周辺に住居域が想定され得る状況である。今回の調査と同時期に行われた第5次調査では、弥生時代中期中頃の貯蔵穴と考えられる土坑が確認されている。貯蔵穴の検出状況では、北側の密度が高く、南にいくほど密度が低くなる傾向が見られ、より北側に集落の中心部を想定している。

第2節 第4次調査の成果

今回の米竹遺跡第4次調査では、弥生時代の土坑を多数検出しており、その中には貯蔵穴と考えられる土坑も確認している。調査区が幅3mと細い2本の逆L字状のトレンチであり、さらに遺構掘削はその一部しか行っていない調査であるため、未掘部分が多いが、出土遺物は、主に弥生土器の東北部九州系や下城式の壺・甕であり、時期が弥生時代中期前半から後半の範囲で捉えられることから、未掘、未完掘部分含めて同時期の遺構であると考えられる。

貯蔵穴と考えられる土坑からは土器以外の炭化米や炭化穀物類などは出土していない。そのため厳密に貯蔵穴であるかどうかの判定はできないが、これまで、大分平野において下郡遺跡群などで炭化米などともに確認された貯蔵穴と平面形状が類似していることを根拠として、今回の調査では貯蔵穴ではないかと推定している。

下郡遺跡群（下郡遺跡群Ⅶ）における平面形状の分類を引用すると円形（楕円形を含む）を呈するもの（A類）、長方形を呈するもの（B類）に分けられ、それらはさらに中央に円形の土坑をもつもの（1類）とまたないもの（2類）に分けられる。

今回確認した貯蔵穴と考えられる土坑および貯蔵穴の可能性のある土坑は、計23基である。円形で中央に土坑をもつもの（A-1類）が13基と一番多く、次いで円形で土坑をもたないもの（A-2類）が5基である。長方形のものは土坑をもつ（B-1類）、もたない（B-2類）に関わらず数が少なく、それぞれ3基と2基の計5基である。A類、中でもA-1類が圧倒的な数を占めており、当地における一般的な形状であったと思われる。規模は径1mから2mのものがほとんどであるが、中にはSK086のように径約2.3mの大きなものも確認できる。全体的にまばらに配置されており、形状による分布の偏りはあまり見られない。

またこれら貯蔵穴と考えられる土坑の断面形状は、ほとんどが袋状やフラスコ状、方形などの壁面が垂直もしくはオーバーハングになる形状である。先の下郡遺跡群では傾斜の少ない断面形状であるが、これまでの周辺調査において検出した同時期の貯蔵穴と考えられる土坑や、第4地点で検出した炭化米出土の貯蔵穴では、同様の断面形状であり、東田室遺跡など大分平野の他遺跡でも見られる形状であるため、米竹遺跡を含め、大分平野における一般的な断面形状であったと考えられる。

貯蔵穴と考えられる土坑の時期は、中期前半から後半にかけてである。形状の偏りが大きい時期の変遷と形状との相関関係は見いだせない。分布に関しては、中期前半に偏属すると考えられるSK010・015・030・035・055・090はほぼ南側、特に南東側に位置しており、偏りが見られる。中期中頃に偏属すると考えられるSK005・040・048・058・060・068・071・075・084・085・086・087は調査区の全体的に広がっており、

特に偏在傾向は認められない。中期後半に帰属すると考えられる貯蔵穴はSK052・SK075・SK084と数が少ないが、南側への偏りが見られ、貯蔵穴以外のSK049・051や南東隅の包含層出土遺物も含めるとより南寄りに偏っているといえる。調査区が狭小で、未掘部分も多いことから、現時点では確定的なことはいえないが、特に中期前半と中期後半の貯蔵穴は南側への偏りが見られる。遺構配置の偏りの他、第4地点、第3次調査、第5次調査において出土した遺物が中期前半から中頃までであるのに対し、今回の調査区では中期後半まで時期的な幅があることを考えると、北側とは別の集落中心部を想定したほうがいいと思われ、その場合はより南もしくは南東側に位置していると予想される。

第3節 結語

これまでの調査成果では、今回の調査区より北側、より台地の先端に近い位置に集落の中心部を想定していた。今回の調査区も当初その範囲内ではないかと考えていたのだが、調査区での遺構配置の状況や第5次調査との比較及びこれまでの調査地との位置関係考えた場合、別の集落中心部を想定したほうが、より集落の実態に則しているのではないと思われる。ただし、このことは必ずしも別集団を意味するものではなく、わずかな時期差による同集団の台地上での移動といった可能性も考えられる。また、第3地点において弥生時代中期の遺構が検出されていない点等を含めると、まだまだその実態は不明であるといわざるを得ない。

今後当該地において調査が行われた場合は、

- ・集落中心部及び集落範囲の特定
- ・集落構造の把握
- ・集落中心部が複数ある可能性の検証

といった課題をもって取り組む必要がある。特に最後の点に関しては今回の調査によって、新たな可能性として浮上してきた問題であり、さらに南側を調査する際には注意が必要である。

周辺での調査回数及び面積が多くないため、まだまだ情報が断片的ではあるが、今後の調査によって、米竹遺跡の集落の構造及び展開について全容を解明できれば、大分平野における台地上に立地する集落構造の特性や、ひいては他遺跡との比較による大分平野の弥生集落の特性などといったことの解明にもつながっていくことが期待される。

【参考文献】

- 大分市教育委員会 1992 『大分市埋蔵文化財調査年報3 一平成3年度一』米竹遺跡確認調査
大分市教育委員会 1997 『大分市埋蔵文化財調査年報Vol.8 1996年度』米竹遺跡
大分市教育委員会 2003 『大分市埋蔵文化財調査年報Vol.14 2002年度』米竹遺跡
大分市教育委員会 2009 『米竹遺跡 第3次調査』一集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一
大分市教育委員会 2010 『下郡遺跡群Ⅵ』

一大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7一



1. 1区完掘状況（北方向より）



2. 1区完掘状況（南方向より）



3. 1区完掘状況（東方向より）



4. 1区完掘状況（西方向より）



5. 2区完掘状況（北方向より）



6. 2区完掘状況（南方向より）



7. 2区完掘状況（東方向より）



8. 2区完掘状況（西方向より）



1. SK005土層断面（北方向より）



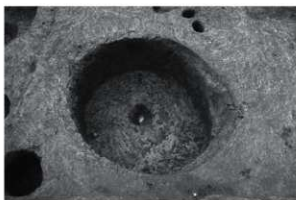
2. SK005完掘状況（東方向より）



3. SK015土層断面（南方向より）



4. SK015完掘状況（東方向より）



5. SK030完掘状況（東方向より）



6. SK035完掘状況（西方向より）



7. SK060土層断面（東方向より）



8. SK060完掘状況（西方向より）



1. SK070土層断面 (西方向より)



2. SK060完掘状況 (東方向より)



3. SK084土層断面 (東方向より)



4. SK075・084完掘状況 (東方向より)



5. SK090完掘状況 (南方向より)



6. SK071土層断面 (南方向より)



7. SK071完掘状況 (西方向より)



8. SK046・048土層断面 (南方向より)



1. SK048土層断面（南方より）



2. SK048完掘状況（西方より）



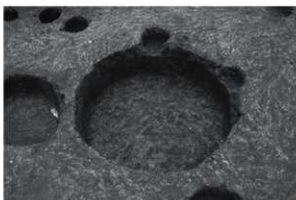
3. SK086・087土層断面（北方より）



4. SK086・087完掘状況（東方より）



5. SK055土層断面（北方より）



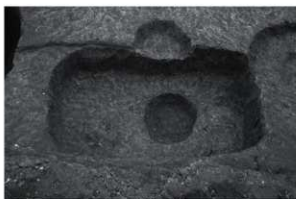
6. SK055完掘（北方より）



7. SK065土層断面（北方より）



8. SK065完掘状況（南方より）



1. SK052完掘状況（北方向より）



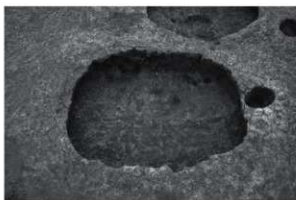
2. SK085土層断面（南方向より）



3. SK085完掘状況（北方向より）



4. SK010土層断面（北方向より）



5. SK010完掘状況（南方向より）



6. SK041遺物出土状況（東方向より）



7. SK051遺物出土状況（南方向より）



8. 調査風景



1. 第15図 SK005 01・02・03



2. 第15図 SK030 01



3. 第15図 SK030 03



4. 第15図 SK035 02・01・04



5. 第15図 SK035 03



6. 第15図 SK075 01・02・03



7. 第15図 SK084 01・02・03・04・05



8. 第15図 SK071 01・02・03



9. 第15図 SK087 01・02・03・04



10. 第16図 SK086 01・02



11. 第17図 SK025 02・01



12. 第17図 SK049 05・04・01・03・02



13. 第17図 SK049 06



14. 第17図 SK051 01



15. 第18図 SK013 01



16. 第18図 SK088 02・01



17. 第18図 SX080 02



18. 第18図 SX080 04

報告書抄録

ふりがな	よねたけいせき だい4じちょうさ
書名	米竹遺跡 第4次調査
副書名	高齢者福祉施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	大分市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第109集
著者	松浦 憲治
編集者	奥村 義貴
編集機関	大分市教育委員会
所在地	〒870-8504 大分市荷揚町2番31号 Tel.097 (534) 6111
発行年月日	西暦2011年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
米竹遺跡 おおいにく 土居あき子 大分市大字千歳		44201	148	33°14'15"	131°40'9"	2010.10.04 2010.10.29	424.6	高齢者福祉施設建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		
米竹遺跡 第4次調査	集落	弥生時代	貯蔵穴			弥生土器・石器 など		

概要

本書は米竹遺跡第4次調査の発掘調査成果を所収したものである。調査では全域において、弥生時代中期の貯蔵穴を確認している。主な出土遺物は下城式土器や東北部九州系のものを中心とした弥生土器の甕・壺・台付鉢や、石鏃・石斧等である。

大分市埋蔵文化財発掘調査報告書 第 109 集

米竹遺跡

第 4 次調査

—高齢者福祉施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2011

平成 23 年 3 月 31 日

発行

大分市教育委員会
大分市荷揚町 2 番 13 号